

まごいし
孫石遺跡

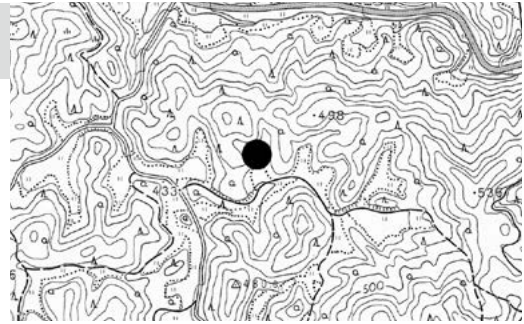
所在地 豊田市下山田代町孫石地内
(北緯35度1分30秒 東経137度19分27秒)

調査理由 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業

調査期間 平成25年5月～平成25年11月

調査面積 7,630㎡

担当者 鈴木正貴・小澤一弘



調査地点 (1/2.5万「大沼」)

調査の経過 調査は愛知県企業庁による豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成25年5月から11月にかけて実施した。調査対象地の現況は旧水田耕作地と植林された山林であり、地形に応じて13A区・13B区・13C区に分けて調査を行った。13B区の調査結果からその北側に遺構・遺物が拡がることが想定されたため、範囲確認調査(30㎡)を実施し、13D区を追加調査することとなった。本調査を実施した面積は合計で7,600㎡である。

立地と環境 孫石遺跡は郡界川の支流の一つである沖川の東岸丘陵部に所在し、沖川に合流する谷川の upstream 部にある緩斜面に位置する。谷を挟んで東に丸山A遺跡、尾根を挟んで西に蔵平遺跡が存在しており、付近には平安時代を中心とした遺跡群が展開している。

遺跡が所在する緩斜面は北に伸びる谷部(13A区)と西に伸びる谷部(13B・D区)に分かれ、この谷が合流して低湿地部(13C区)に至る。調査地点の標高は448～470mを測る。

調査の概要 調査の結果、縄文時代と平安時代および近代の遺構や遺物が確認されており、特に平安時代の遺構や遺物が多く認められた。現地表面では確認することができない小規模な谷地形もいくつか検出され、そこに黒褐色土が堆積していた。中でも、2つの谷地形の間の斜面(13C・D区)には埋没した谷地形が存在し、激しい湧水が確認された。黒褐色土は地山である花崗岩風化土の再堆積層を挟んで3層確認される場合もあるが、基本的に遺構は最上位の黒褐色土上面から構築されている。便宜上、黒褐色土の堆積が厚く灰釉陶器が多数出土する13B・D区で2面(黒褐色土上面と地山上面)、黒褐色土の堆積が薄いあるいは無い13A・C区で1面(地山上面)の調査を行った。以下、時期ごとに遺構の概要を報告する。

縄文時代 縄文時代の遺物としては、土器片や石器が散在してわずかに出土しているに過ぎない。遺構としては明確なものはなく、縄文時代と推定される陥穴は13A区で1基(014SK)、13B区で4基(281SK・287SK・295SK・297SK)、13D区で2基(182SK・186SK)が確認された。陥穴は、緩斜面がやや急斜面に変わる変換部に構築される傾向があり、概ね隅丸方形または楕円形の平面プランを持ち、床面にピットを1～2個有する。ほとんどが黒褐色土を除去した状態で検出されたが、埋土の状態からみて本来は黒褐色土上面から設置されたものと思われる。

平安時代 13B区と13D区を中心に掘立柱建物約6棟、竪穴状遺構約10基、炉跡3基の他に溝や土坑などの遺構が多数確認された。

掘立柱建物は柱間が1～2間の小規模なもので、308SBをはじめとする多くの建物は13B区の谷底緩斜面に所在する。一方、やや急な斜面には谷を挟んで対面するように1間×1間の掘立柱建物(13B区306SB・13D区194SB)が建つ。竪穴状遺構は斜面中に平坦面

を切り出す形で造られており、一辺が2～3mと小規模なものが多いが、長辺が5mを超えるもの(13B区194SIなど)もある。柱穴や壁溝等は存在せず、中央に炉跡と推定される焼土が確認される場合(13D区032SIなど)がある。谷底の緩斜面を囲むように排水用と思われる数条の溝(13B区207・211SDなど)が確認されたが、このうちのいくつかは平安時代まで遡る可能性がある。

13B区の谷頭部の緩斜面には浅くて平面規模が大きい土坑044SXが存在し、埋土から折戸53号窯式期前後に属する灰釉陶器類や土師器甕が多数出土した。また、鉄鏃1点と椀型鉄滓20点以上も出土しており、床面で炉跡1基と炭化材が散布している状態が確認された。13B区の谷開口部付近の平坦面では、炉跡が2基(178SL・179SL)確認され、焼土直上で椀型鉄滓が出土したことから、鍛冶炉であった可能性が考えられる。

掘立柱建物と竪穴状遺構はともに規模が小さく居住には適さないものと思われることから、作業場のような機能を果たしていたと推定される。鍛冶炉と思われる遺構の存在は、作業の内容を考える上で重要な資料となるだろう。鉄滓などの散漫な出土状況からみて、本格的な金属製品生産の場というよりは金属製品を多用する作業場であったと想定したい。

近代では炭焼窯や溝などが検出された。炭焼窯は外縁部に焼土が確認される浅い土坑のタイプと焚口と煙道を持つタイプが存在する。13A区001SYは焚口と煙道を持ち、壁面の一部に石を貼付けたもので窯体内には天井壁が崩落していた。13B区278SYは石敷の床面を持つもので煙道部も石材で造り付けられていた。278SYに近接して13B区279SYがあり、同様の形状を呈すると思われるが、床面には石敷を持たないものである。

まとめ 今回の調査では、大きく3時期の遺構群が確認されたが、いずれも山の生業に関わる遺構・遺物群であり、居住域とは考えにくい状況であった。今後は近在する遺跡群と比較して、生業全体の様相を把握することにより、その中で孫石遺跡が果たした役割を明らかにしていく必要があるだろう。(鈴木正貴・小澤一弘)



孫石遺跡 調査区遠景 (南東から)



13B区207SD・211SD(南から)



13D区遺物出土状態(南から)



13C区谷頭部遺物出土状態(南から)

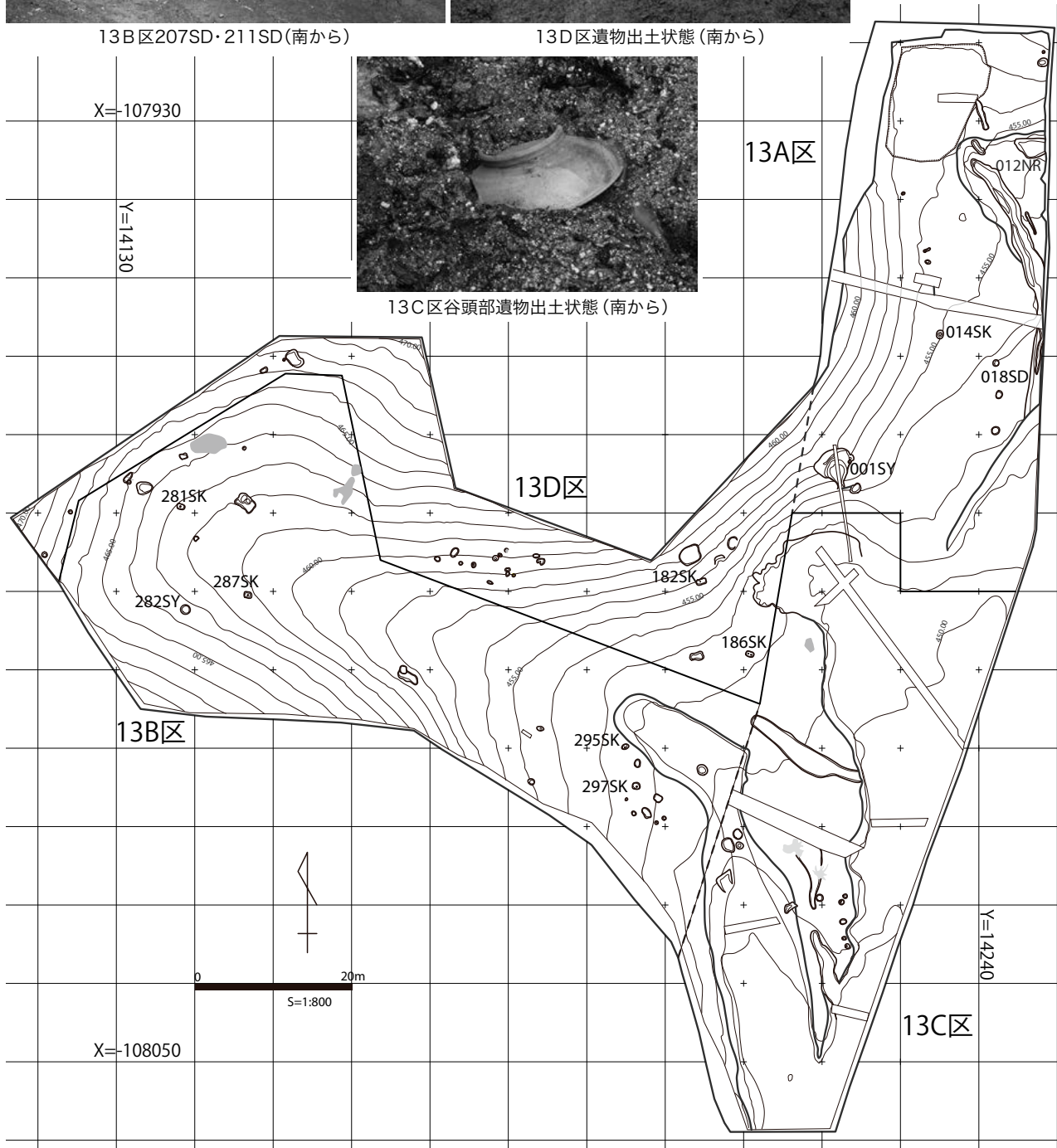


図1 第2面遺構全体図(1:800)

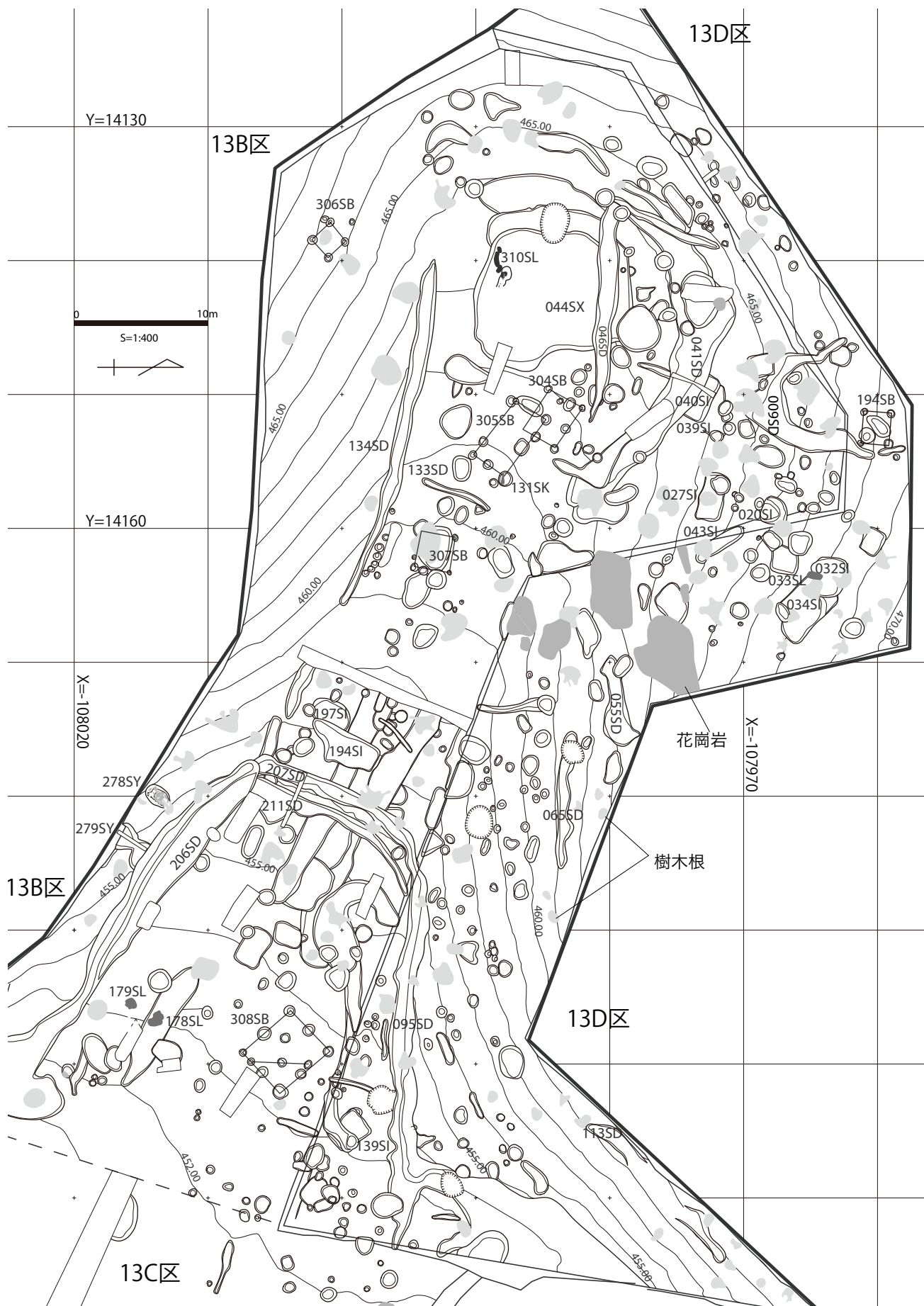
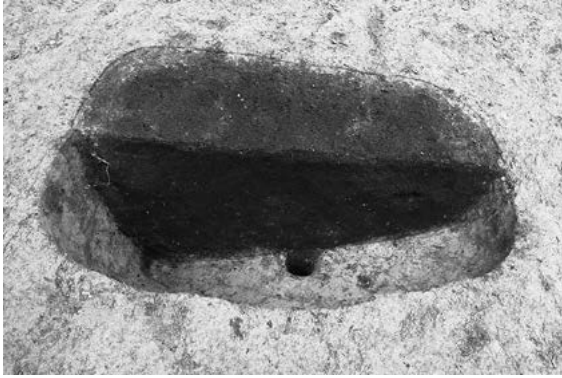


図2 13B区・13D区第1面主要遺構配置図 (1:400)



13B区281SK土層断面(南から)



13D区斜面と谷頭(南東から)



13A区014SK(東から)



13C区谷地形(北西から)



13B区308SB(南西から)



13B区178SL・179SL土層断面(南西から)



13B区194SI土層断面(南から)



13D区032SI土層断面(北から)



13B区044SX 土層断面 (南から)



13A区北壁土層断面 (南から)



13B区278SY 窯体内 (北西から)



13A区001SY 窯体内 (南東から)



13B区279SY (北から)